

ノルベルト・エリアスの宮廷社会論

——社会学のモデルとしての宮廷社会

大平 章

(1) 『宮廷社会』出版の経緯をめぐって

ノルベルト・エリアスの社会学理論を決定づける意味で『宮廷社会』が果たす役割は決して小さくないが、この書も、彼の大著『文明化の過程』と同様、出版にいたるまでの経緯はかなり複雑である。エリアスの著作のいくつかは、彼の紆余曲折を経た人生のごとく、ドイツ語と英語の二つの言語で書かれている。『文明化の過程』の中にはすでにフランス宮廷社会への言及がいくつかあり、しかもそれが社会学のモデルとして重要な理論的方向性を示唆していることからして、その構想がほぼ同時に進行していたと考えてよい。ところが、『文明化の過程』が1939年に上梓されたのに対して、『宮廷社会』の出版は下って1969年であり、両書の間にはちょうど30年の時間的な隔りがある⁽¹⁾。そういうわけで、『宮廷社会』の理論的枠組に『文明化の過程』のそれとは違う、独立した何かがあると予想されてもそれほど不思議ではなからう。

エリアスの社会学の紹介は英語圏ではかなり遅く、『文明化の過程』の上巻が1978年、下巻が1982年、さらに『宮廷社会』が1983年に出版されている。英訳の出版年については、原典であるドイツ語版のそれと比べると、時間的にさほど大きな隔りはないので、英語圏の読者から見れば、両書を理論的に同レベルで捉えられるという利点がいくぶんあるかもしれない。が、逆に英語版しか知らない読者は、エリアスの社会学理論の骨子

が早い時期に出来上がっていたにもかかわらず、彼の祖国ドイツでも、ナチスの台頭により彼が英国に亡命せざるをえなかったという事情もあって、それが長い間、顧みられなかったという事実を忘れがちである。

重要な問題は、いくぶん世界的な規模でエリアスの社会学に関心が寄せられるようになったのは比較的近年であるのに、彼がその基本的な概念を構築したのは少なくとも第二次世界大戦以前であったということである。換言すれば、文明化の過程の理論と宮廷社会のモデルは相互補完的なものであり、その不可分な関係は、エリアスの社会学がかなり早い時期に方向づけられていたことを示唆している。

実際、エリアスは大学教授資格論文として1933年に、カール・マンハイムの指導のもとで『宮廷社会』の原稿を完成させており⁽²⁾、少なくともその概要は、基本的には『文明化の過程』の中で何度か提示されている「フランス宮廷社会」の概念に通じるものであると思われる。『文明化の過程』第三部でエリアスは早くも、マナーやエチケットが宮廷社会を通じて上流階級の間でますます洗練され、それが人間の行動を縛る大きな圧力（外的束縛）として作用する過程を、暴力や武力を背景とする封建的騎士の世界から、自己規制と他者の心理を読み取る洞察力（内的束縛）が求められる宮廷人の世界への変遷過程と連動させながら、同時に具体例を挙げながら論じている⁽³⁾。つまり、宮廷社会は、個人の衝動や感情や動物的欲望に訴えることがますます禁じられ、タブー化され、それが、現代の産業社会や官僚機構の心理的必要条件であるいわゆる「合理性」に取って代わられる過程として、あるいはその方向をさらに推進するメカニズムの温床として位置づけられるのである。

ここで重要な問題は、宮廷社会の出現は、それ以前に存在した中世の封建社会が完全に崩壊し、突如として新しい統合的な社会形態が生れたというふうに理解されるものではなく、大きな政治的統合体に対抗する封建社会の遠心力が徐々に衰え、より安定した租税独占と暴力独占の制度を伴う国家形成の一過程として、またその方向へのさらなる求心力の強化として

捉えられていることである。その条件として、個々の城で独立した支配権をもっていた中世の騎士的貴族が、宮廷貴族に転身し、絶対的権力を有する国王に従属しながら王宮に住むことを余儀なくされたことが挙げられ、エリアスはこれを「戦士の廷臣化」と定義づけた⁽⁴⁾。中世では遠心的な勢力と求心的な勢力が対立拮抗の状態を繰り返すが、16世紀になるとやがて変化が生じ、とりわけフランスでは「独占のメカニズム」が中央の支配者に、つまり絶対主義的君主の方に有利に傾き、君主はより広大な領土を獲得するだけでなく、自らの支配体制を以前よりもさらに安定化、和平化することに成功する。そして、この君主による絶対主義的支配体制は「朕は国家なり」という名言を吐いたルイ14世の時代に頂点に達するのである。こうした状況が「戦士の廷臣化」の心理発生・社会発生の背景となり、やがて封建時代の騎士の人間像とは違う宮廷貴族独自の人格構造、つまりエリアスの言う「ハビタス」へと発展する⁽⁵⁾。それは同時に、中世後期から徐々に西ヨーロッパ社会を文明化の方向へと導いた上流階級の日常生活におけるマナーやエチケットの洗練と呼応し、やがて宮廷社会の「礼儀正しさ」の概念に収斂する。が、それは最終段階としての国家や道徳のモデルではなく、むしろ産業ブルジョアジーの合理的精神や近代的国家概念を用意する一種の過渡的なモデルにしかすぎない。

このように宮廷社会の諸特徴はすでに本質的な社会学的議論を喚起しているが、ここではあくまでも文明化の過程の理論をより緻密にし、説得力のあるものとして提示するための手段として使われており、その多くは『宮廷社会』においてより明確な概念として提示され、エリアス独自の先駆的な分析方法へと発展していると言えよう。それでは次に『宮廷社会』の全容を、上記のような観点からさらに詳しく論じることにはしたい。

(2) 序論における「社会学」と「歴史学」の問題

1969年に出版された『宮廷社会』には、「社会学と歴史学」と題された

かなり長い序論が付けられている。そこでエリ阿斯は、『文明化の過程』（1969年版）の序論で主にタルコット・パーソンズの構造・機能主義の方法論を批判しつつ、「相互依存の連鎖」の概念に基づく自らの発展社会学もしくは過程社会学の有効性を提示したのとはほぼ同じ趣旨で、社会学と歴史学の関係について独自の見解を披歴している。その基本的な姿勢は、歴史学に社会学の概念を導入し、同時に社会学に歴史学の成果を採り入れることで、社会科学全体を新たな観点から統合する可能性を示唆するというものである。カントの名言を借りれば、それは「歴史学の視点をもたない社会学は空虚であり、また逆に社会学の視点をもたない歴史学は盲目である」という比喩的な表現でも示されるかもしれない⁽⁶⁾。

エリ阿斯が宮廷社会を社会学の有効なモデルとして構築しようとした背景には少なくともそうした理由がある。そうして初めて、租税権や警察力を独占する機構の初期形態として宮廷社会は、現代から切り離された過去の遺物としてではなく、現代の産業国家、もしくはそれ以前の封建社会と相互に関係するもの、連続的もしくは発展的なものとして意味をもつ。それゆえ、エリ阿斯にとって、それを実現するには、それぞれ独立した分野であった社会学や歴史学の従来の方法が、両方の学問領域の有機的関連性という観点から、批判され、克服されなければならないのである。

急激な産業化、都市化を経て王朝は別の権力集団にその場を譲るが、エリ阿斯は、どのようにして相互に依存する形態が、何百年も一人の国王や一つの王朝によって支配されるかという問題に宮廷社会の社会学的研究の重要な課題を求める。宮廷社会は多くの国家で見られる現象であるから、社会学の課題はさまざまな宮廷社会を比較するためのモデルを作ることにある。よく調べてみると国王は絶対君主として絶大な権力をもっているのではなく、相互依存のネットワークに捕えられているのであり、したがって、ルイ14世のような国王が宮廷を支配している特殊な戦略を分析しないで、つまりこの特殊な社会学のモデルを念頭に入れないで支配者の行動を理解し、説明することはできないのである。かくして、従来の社会学の

方法では説明できない、あるいは十分に理論化できない宮廷社会の構造を解明するにはどのようなモデルが必要とされるかという問題が浮上する。

そこで社会学と歴史学の関係が問われることになるが、エリアスによると、従来の歴史学は、社会学にそうした有効なモデルを提供できるほど、十分に理論化されてはいない。それは、たとえば、歴史家が17、18世紀のフランス宮廷社会に関心をもつとき、その研究対象は歴史的事象や事件の一回性、唯一無二性に、つまり、宮廷社会の特別な個人や繰り返すことのない社会組織にのみに置かれてしまうからであり、結果的に歴史家は、個人の社会的立場をつながりのない個別的な行為の積み重ねとして捉えてしまい、特別な現象間の関係を恣意的な解釈や思索に任せることで、研究の実際の継続性を保証する理論的根拠が供給できないからである。エリアスは、資料を綿密に検討し、文章上の記録を入念に確認することで、つまり原資料に立ち返ることで歴史学の重要な地歩を築き、社会学への可能性を示唆したランケの立場を評価しつつも、それだけでは解釈の問題が未解決のままであると批判する。つまり、ここでエリアスは、歴史家には具体的な方針に基づいて出来事を関連させるモデルの構築に寄与する強固な枠組み、および有効な仮説や理論がないことを指摘しているのである。それを克服するには常に拡大し、発展する知識が必要であり、それとの接触によって特別な資料の選択、総合的なモデルの発展にかなりの自律性が与えられると、エリアスは論じる。それは、同時に歴史学に社会学的な視野を導入する契機となるが、社会学の方でも、もしそれが新しい知識によって自律的で的確なモデルを作る意図をもたなければ、個々の問題の設定が他律的な価値観によって恣意的になされるか、研究者集団の伝統に支配されてしまう、とエリアスは警告する。

エリアスはさらに続けて、伝統的な歴史学の認識の原点とも言える歴史の対象物の一回性、唯一無二性という考え方を批判する。なぜなら、動物や植物は進化しないかぎり、唯一無二性という特徴を示し、変わることはないが、人間の場合、進化しなくても社会構造や社会集団の価値観が異な

るからである。たとえば、アンシャン・レジームが産業社会に変化し、農業社会が都市社会に変わるのとは、生物学的変化ではなく、人間社会の社会学的変化を意味するからである。この変化しつつある多様な人間社会の諸相を支える力学、つまり、それぞれ変化はするが同じような形で人間諸集団が相互に織り成すネットワークをエリアスは「形態／図柄／関係構造」という概念で捉えようとしており⁽⁷⁾、その概念を応用してフランス宮廷社会を、一見、独自の、唯一無二的ではあるが、それ以前の中世封建社会やそれ以後の近代産業社会などの別の社会とも比較でき、あるいはそれらと相互依存的な関係性をもつ社会学的モデルとして提示するのが『宮廷社会』の目的であった。この「形態」をエリアスは、時折、誤解を招きやすいような言葉を使って、「秩序」や「法則」と命名するが、それは構造主義的な概念ではないし、物理学などの普遍的法則でもない。それはあくまでも動的な概念であり、従来の静的な哲学的認識論へのアンチテーゼでもある。したがって、ここでは「物質」と「精神」、「労働」と「余暇」、「善」と「悪」、「秩序」と「無秩序」のような価値判断に残存している伝統的な二分法を止めなければならない。さらに「形態」とは、全体を個に分解したり、個を寄せ集めて全体と見なしたりするような還元主義的、原子論的な解釈では説明できない。

現段階ではそれを言語のレベルで完璧に説明するのは無理かもしれないが、国王を頂点とした絶対主義的政治制度の下で存在していた宮廷社会の諸機能を司るある種の自動機械的メカニズムを、個々の事例によって解釈すれば、その理解は自ずと容易になろう。端的に言えば、「形態」とは人間諸集団そのものがある状況で方位設定する、またそうせざるをえなくなる変化のパターンであり、個々のネットワークのありようは違っても、その形成過程には同じ力学が働くとして解釈できる。それは、特定の始まりをもたないし、人間社会が存続するかぎり、終わることなく継続する運動である。またその運動に個人が主体的に参加できるが、その方向を個人は変えられない。したがって、エリアスが「西洋では騎士・小姓・僧侶・徒弟の

身分制度は長く続いたが、現在では労働者・被雇用者・経営者という人間の形態になっている。個人は唯一無二かもしれないが、全体の形態は変わらない……ウェーバーが理想的タイプとして発展させようとした官僚制・都市・国家・資本主義社会というモデルには形態への言及がないが、それは彼が無秩序なものに秩序を与えようとしたためであった」と言うとき⁽⁸⁾、そこで使われる「形態」という言葉には、それに動的なニュアンスを加えればさほど矛盾はない。

こうして、エリアスは、個人を万物の長期的尺度として見ることで、ルイ14世などの偉大な個人が唯一無二の象徴とされ、さらに、支配者やエリートに帰せられる政治・宗教・文化・芸術が、特定の人間の所産として論じられる場合、それを社会学的な視点を欠いた議論と見なす。なぜなら、歴史を形成する個人の業績を評価するには、その人が生きている社会の構造との関係が系統的に論じられなければならないからである。エリート集団の構造的説明がないのに、歴史的人物の偉大さや長所を判定することはできないし、逆に、たとえば、宮廷社会の構造が分かれば、ルイ14世の時代にはなぜ宮廷社会に属していない人はほとんど評価されなかったかが分かるからである。つまり、宮廷社会の権力構造は政治や文化の次元だけでなく、マナーやエチケットの規範によって日常生活の次元にも浸透していたからである。換言すれば、そうした権力の推移や変化は、あらゆる価値基準を究極的には個人の行動や資質に求める従来の歴史学の方法ではうまく説明できないからである。エリアスは、身分の高い貴族でありながら、ルイ14世の時代に政権から遠ざけられ、要職に就けなかったサン・シモンに言及し、なぜ彼がそうなったのか、どのようにして彼は自分を引き立たせようとしたのかを知るには社会学的診断を必要とすると述べているが、これも「形態」に内在する反発力を知る上で重要である。なぜなら、一つの支配体制は必ずしも均衡した、矛盾や対立のない空間ではないからである。実際、宮廷社会は比較的長く安定していたとはいえ、革命勢力や宗教対立などの外部からの圧力のみならず、異なった派閥や党派による権

力をめぐる内部抗争にもさらされていたのである。したがって、エリ阿斯が指摘するように、敵対者は別の時代の勝利者になる可能性がある。

こうして、歴史の一回性や唯一無二性を主張する歴史学の方法の限界を指摘し、そこに社会学的視野を導入する必要性を示唆し、ウェーバーの「理想型」というモデル——エリ阿斯はウェーバーの権力論の社会学は先駆的、包括的であるが集約的ではないと言う——とは違う自分自身の新しい巨視的な社会学の概念を、彼はだいたい以下のように説明する。これは『文明化の過程』の序論でも指摘されたことではあるが、経験的な事例の提示と理論的統合による宮廷社会の社会学的研究の意味を再認識する上で重要である。

権力の社会関係を具体的に説明し、理論化するのが社会学の役目である。多くの相互依存する人間集団を分析することで個人の意味が分かる。偉大な人間や強いリーダーの特質もそうした形態分析で解明される。こうした形態はあまりに緩やかに動くので、個人はまるで社会の彼方にあるように見える。このような形態が多くの人によって、何年もの間隔を経て形成されるので、個人はまるで形態の外にあるように見える。こうした視覚的幻想によってつながっているのが社会と個人である。しかし、現実をよく見れば、個人と社会の関係は明らかである。社会的形態を形成する人間は次々に入れ替わる。しかし、個人がいくら入れ替わってもこの形態、人間の相互依存の連鎖は常に作られる。歴史家はこの形態のない個人を見て、それを研究の最終目標にする。社会学は形態を見て、個人を抽象化し、「システム」や「社会」をもっぱら研究しようとする。この分裂傾向が実践者の方向を見誤らせることになる。この二つの方法は不可分であり、切り離すべきではない⁽⁹⁾。

エリ阿斯はここで「社会」と「個人」の関係に言及しているが、これも

彼が初めて議論した問題ではない。その他の著書でも彼は両者の不可分性を繰り返し強調している。重要な問題は、その不可分性をどのようにすればうまく理論化でき、社会学もしくは社会科学の方法として応用可能なかということである。人間のいない社会はないのに、われわれは人間とは別個に社会が存在すると錯覚し、個々の人間の総和が社会になると思込む。したがって、前者は、社会やシステムという言葉で人間を収容する容器の形状や種類について語ろうとし、後者はその容器の中身を一つずつ吟味しようとするのである。実際この不思議な「ニワトリと卵の関係」は長い間、社会学や歴史学のみならず人間社会に関する実りある研究を阻害してきたとエリアスは考えているのである。さまざまな社会に生きているさまざまな人間集団がいるのに、特定の社会に生きている特定の人間集団の生活様式が優先されたり、高く評価されたりするのである。かくして、高度な産業システムや金融制度やテクノロジーをもつ先進国は、その恩恵に浴することの少ない発展途上国よりも高く評価され、文化的大都会は過疎化の進んだ村よりも良いイメージを人間に与えるのである。田舎があるから町があり、途上国があるから先進国があるのに、その不可分な関係は忘れられ、すべてが現代中心の価値基準に還元されることになる。同様に、宮廷社会もそうした現代的なカテゴリーからはずされ、価値の低い制度、古めかしい組織と見なされたり、あるいはロマン化されたりする。こうした状況を踏まえ、それを克服するためにエリアスは続けて次のように言う。

社会学者は自分の感情を抑え、自律的な価値判断をしなければならない。主題の選択に当たって現代中心の価値観を先行させてはならない。宮廷社会は現代の価値観からすればあまり意味のない社会かもしれない。しかし、客観的な研究という立場からすれば、宮廷人や宮廷社会は特殊な人間の形態として、議会や政党などのエリート集団、より話題性の高い現代的なテーマと同じく重要である。儀式やマナーやエチケットはブルジョア社会では価値は低い、宮廷社会では高い。そ

ういう基準を古い社会に合わせないと真の社会学研究はできない。そういう基準を理解すれば、宮廷人がマナーやエチケットを高く評価し、それに基づいて人間の相互依存関係が形成されたことが分かる。これが自律的な研究であり、他律的な価値観に基づく研究とは異なる。個人の自由とか、決定論的観念などの科学的でない、哲学的、形而上学的な観念に頼ると系統的かつ経験的な研究の道が閉ざされる⁽¹⁰⁾。

ここでは「自律的」な価値判断と「他律的」な価値観という表現が決め手となる。前者は経験的な研究から得られる社会学独自の方法であり、「形態」、「相互依存」、「編み合わせ」などの術語で代表されるエリアス自身の過程社会学、もしくは発展社会学である。そして、後者は決定論的経済思想や物理学の普遍法則や個人中心の哲学思想である。エリアスの次の議論はさらに両者の関係を明らかにする。

政治的、形而上学的な先入観やイデオロギーは科学的な研究の妨げになる。ルイ 14 世は絶対的に自由であったわけでもないし、絶対的に社会に支配されていたわけでもない。物理的關係（決定論）から引き出される問題（ぶつかり合うビリヤードの球のように人間は同じ反応をする）も、それに反対する形而上学的な「自由の概念」も同じく、社会学、歴史学の問題を解決しはしない。多くの人間が同時に存在するという事実から判断すれば、人間が絶対的に自由であるとか、社会的、物理的方法に縛られているという前提は正しくないことが分かる⁽¹¹⁾。

ここでエリアスは、当時の政治思想や哲学的潮流に影響力をもっていたマルクス主義や実存主義を間接的に批判しているようであるが、次の見解には、『文明化の過程』の序論でも見られるように、タルコット・パーソンの批判を通じて、最終的な自分自身の社会学の方法論の全容を簡潔に

披歴しており、合わせて『宮廷社会』を理解するための必要かつ十分な条件を提示している。

人間の自由とか決定性が相対的であることは相互依存のモデルが示してくれる。歴史学の「自由の概念」も社会学の「決定性」も有効な概念ではないことが分かる。形態社会学は明らかにタルコット・パーソンの理論とは異なる。行為論、決定論、社会と人間の分離などの思考を越える概念は、「形態」という社会的概念に他ならない。歴史的諸関連の研究において、支配的である「他律的評価」を、「自律的評価」と入れ替えなければ、より多くの継続性をもつ研究を達成しようとする努力は実らないであろう。時局が安定すれば、歴史にはより継続的な発展が約束される。長期的な形態分析に基づく社会学の研究は、時局が非常に不安定になれば容易になされない。こうした観点から長期的過程の社会学のモデル、国家形成のモデル、およびそのような過程で明確な形をとる「宮廷社会」のモデルを試すことは有益である。そうしたモデルは、主題の自律性が研究者の先入観やほかの理想によって曖昧にされない諸関係のモデルをうまく作り上げる試みなのである。いかなるモデルも、いかなる理論も絶対的ではない。こうした試みは単なる出発点にしかすぎないのである⁽¹²⁾。

『宮廷社会』の基本的な研究姿勢はこの引用でほぼ言い尽くされているが、さらにいくつか注目すべき点に言及すれば、一方は、長期的な形態分析に基づく社会学の研究は時局が安定しなければ容易になされないという発言であり、他方は、社会学のいかなるモデルや理論も絶対的ではなく、出発点にしかすぎないという見方である。両方とも一見、自明の理と思われるかもしれない。しかし、社会科学の研究はこうしたエリアスの助言をしばしば無視する傾向がある。前者は、革命や戦争や経済不況などで社会が混乱し、研究者が十分に研究対象から距離を置くことができず、エリア

スの言う「現実適合的」知識が得られない状況を指す。その場合、「参加」の度合いが高まり、研究者の立場は自分が属する集団や組織や党派、あるいは自分の国に好都合な価値観に支配されやすくなる⁽¹³⁾。つまり、それは非現実的な幻想やユートピア的理想に陥りやすくなる。後者は、こうした状況に惹起されがちな、研究者の理論やモデルへの絶対的な信仰に関連する。エリアスが指摘するように、社会科学の仮説や理論やモデルは、自然科学のそれに比べて、必ずしも満足度は高くはない。しかし、それが自律的なものであり、それによって研究対象の本質がある程度、説明可能になれば、それで十分満足できるのである。したがって、他律的な自然科学のモデルや法則に頼る必要はないのである。

エリアスはさらに社会学の研究対象としてフランス宮廷社会に依然として意味があり、そのモデルが有効であることを証明するために、『宮廷社会』の最初の章で再度この問題を取り上げている。もし1969年版の序文がなければ、おそらくこの章が実質的な序論となった可能性がある。エリアスはここで、これまで社会学者や歴史学者によって宮廷社会や宮廷人がどのように捉えられてきたかを論じるために、その例として、オッペンハイマー、ウェーバー、ゾンバルトの見解を引き合いに出す。まずエリアスは、感情的な価値判断から自由になるべきであるのに、ブルジョアの宮廷社会に対する反感や反抗の残余効果が宮廷社会の構造の研究とその機能の理解を阻んでいると述べながら、オッペンハイマーは、宮廷社会への固定観念から脱しきれず、それに対する客観的態度が欠けており、彼は、宮廷社会を「あらゆる形の社会的富を包括しようとする社会形態」と見なした、と論じる⁽¹⁴⁾。一方、ウェーバーについては、ウェーバーは宮廷人の贅沢を「社会的な自己主張の手段」と捉え、それを単なる表面的なものとは見なさなかったが、彼は宮廷社会の特徴の一つを示したにすぎない、と言う⁽¹⁵⁾。さらに、ゾンバルトに関連して、エリアスは、われわれの社会に近い歴史的的事象になると他律的価値に左右されて客観的立場をとることが難しくなり、たとえば「奢侈」や「贅沢」を宮廷社会の本質的要素として

個別化し、勝手な判断をしやすくなるが、他律的な価値判断も必ずしも間違っていないと前置きしながら、ゾンバルトの宮廷社会の定義はそれを資本主義の台頭と結びつけることで、つまりその特質を「奢侈の中心」と見なすことでその構造を明確に論じており、フランス宮廷社会を重要な社会構造として捉えることで有益である、と評価する⁽¹⁶⁾。そして、この章の最後で、エリ阿斯は宮廷社会の社会学的研究が有する最も重要で先駆的な理論的枠組みを次のように明確に提示しており、そこにはいくぶんヘーゲルやマルクスの弁証法的発想との関連が見られるかもしれないが、それは絶対的な真理に到達しようとする哲学的認識論としてではなく、あくまでも経験的なモデルに立脚して組み立てられた社会学の方法論の可能性を示唆するものとして解されるべきであろう。

その発展段階の中心として——それは長い闘争の後で急に、あるいは徐々に職業的・ブルジョア的・産業的段階にその力を譲るが——この貴族的・宮廷的社会は、文化や文明化を促す特徴を發展させる。それは職業的ブルジョアによって一部は遺産として、また一部はアンチテーゼとして受け継がれ、さらにこのような形で保持され、發展させられる。宮廷社会の構造を研究することで、また最後の偉大な非ブルジョア的な西洋の社会形態を理解することで、われわれは間接的に現代の職業的・ブルジョア的・都会的・産業社会の理解を増大させることができる⁽¹⁷⁾。

(3) フランス宮廷社会の構造——日常生活・マナー・権力推移

エリ阿斯は、宮廷社会と宮廷生活が当時の人間世界、およびアンシャン・レژیムの絶対的君主を全体的に理解するための原点であり、それゆえ宮廷の社会学が君主制の社会学であるという前提から、まず宮廷社会の日常生活の諸相、儀式的な役割を果たすマナーやエチケットの構造や機

能に言及し、徐々にその分析を通して宮廷社会の権力構造や支配機構全体を貫く力学の本質に肉薄する。そのような意味でも、日常生活は決して人間の精神的・文化的資源と切り離されるものではない。むしろその小さな次元に、宮廷社会全体のヒエラルキーを維持する大きな原動力があり、宮廷エリートがそこで示す模範は、多少の反発を含みながらもやがて市民階級の一部に浸透し、両者が複雑に相互依存しながら、フランス独特の文明化の方向を示唆する。

かくして、エリ阿斯が最初に着目するのは宮廷人の住居の概念である。それは現代人の住居に関する考え方とはかなり違い、そこにも宮廷社会固有のヒエラルキーやそれに依拠する価値基準が含まれている。つまり住居は宮廷人の社会的地位や価値観の表象である。エリ阿斯は国王や宮廷人の住居の社会学的分析をだいたい次のように展開する。

国王の居住場所としてのベルサイユ宮殿、およびその所在地であるパリが住居のヒエラルキーの象徴であった。宮廷人の多くはベルサイユ宮殿とパリの「館」(hôtel)で暮らした。宮廷人はベルサイユ宮殿、その他のお城、田舎の邸宅などを転々とした。したがって、都会には消費者として暮らし、大勢の使用人がいた。また宮廷人の家の概念や経済観念も違っていた。地位の高い者はそれにふさわしい家に住み、それを誇示した。彼らの経済観念は職業的ブルジョアジーの蓄財精神とは違い贅沢を当然視し、それはまた彼らのエトスの表れであった。このエトスは宮廷社会の構造や活動から生まれ、それは同時に彼らの活動を維持する前提条件であった。家は社会階級によって区別された。国王やその家族は「宮殿」(palais)、貴族は「館」、職業的ブルジョアジーは「家」(maison)に住んだ。

こうした説明それ自体はそれほど驚くべきことではない。現代の豊かな産業社会でも家はだいたいその所有者の収入に応じて建てられるし、産業界やスポーツ界や芸能界で成功した人間は宮殿のような家を建てることもできよう。いわゆる発展途上国でも家の規模は「持てる者」と「持たざる者」の経済格差の象徴でもある。ところが、ここで言及されているフラン

ス宮廷人の家の概念は、次のようなエリアスの説明を前提とすれば、現代のものとはかなり違うことがさらに分かってくる。つまりそこには「経済」とか「金銭」などの価値観はあまり入らず、地位の高い人間からすれば、むしろそれは軽蔑の対象にもなりうる。

身分の違いと家の違いの関係は重要であった。なぜなら宮廷人から見れば、職業的市民は部外者であり、身分の低い人たちだったからである。したがって、その家は宮殿のような公的・外面的な性格はなく、あくまでも個人が使うものであり、またその意味で個人用であり、今のような特別に使用される裕福な人の家とは違っていた。経済的な家屋という市民の感覚は、身分や格式を重んじる宮廷人にはなかった。いかなる貴族も国王より立派な家を建てることは許されず、それは時の権力構造の反映であった。フランスの第三階級も裕福になって、細かく分かれ、中には武家貴族に接近する者も現れ、住居もそれに近いものを建てた。

こうした説明によって、われわれはさらに宮廷社会の家の概念が経済的なカテゴリーに含まれるものではなく、むしろ宮廷人の名声やプライドの表象であり、同時に宮廷社会のヒエラルキーの代替物であったことが分かる。したがって、産業活動に従事する一般市民は、宮廷人から見れば「部外者」であり、社会の「周縁人」なのである。しかし、それは専制的古代社会のきわめて厳格な身分制社会ではなく、「部外者」が「定着者」である宮廷人の社会に徐々に接近し、その文化的圏内に参入できる可能性が生じたことを意味する。「武家貴族に接近する者」とは一部のブルジョア的市民階級のこと（この場合、エリアスは産業革命時代の、あるいはそれ以後の工場経営者のような階級ではなく、絶対王政時代の市民階級を指している）であり、彼らの接近運動が激しくなればなるほど、宮廷人は自分のプライドを守り、両者の間に差をつけざるをえなくなる。こうした両者の依存関係、編み合わせ状態が次のエリアスの説明でさらに明確になる。ここでもまたエリアスは独自の社会学的概念によってそれを分析する。

家屋のみならず、あらゆる外面的な行動が彼らの階級的差異を象徴して

いた。上流階級は自分の地位を示すのに経済的浪費を惜しまなかった。貴族もさまざまに区分化され、それに応じて家の建て方も違った。しかし、その地位には政治的、行政的機能があったわけではない。政治的な絶対権力は国王が握っていたので、貴族は地位や家を名誉で自己主張した。貴族の生活条件は、職業的ブルジョアのそれとはまったく違って、経済中心主義ではなかった。逆にそれが彼らの経済的立場を弱めた。商人、財務家、金融業者の地位は、貴族が体面を保つためにお金を費やせば、それだけ高くなった。逆にこうした市民階級の間でも価値観は、経済的エトスから貴族的な価値観、地位や名誉に移ったし、それが彼らの生活を象徴した。

ここで注目すべき点は、宮廷人の生活が経済中心ではなく、そのことによって宮廷人は自らの経済的立場を弱めたという点である。つまり、労働や商業活動から経済的利益を獲得する生活体験がないがゆえに、宮廷人は自らのプライドや体面を保つためには商業的市民階級に頼らざるを得ないのである。が、逆にそのことで、つまり、彼らと相互に交わることで、宮廷人はその文化的資源の一部を彼らに譲り渡すことになり、かくして権力配分に微妙な変化が生じる。ここに宮廷人が「部外者」と見なした商業的市民階級が上昇するチャンスが生まれるが、それは宮廷人が自らの勢力範囲を広げるための「地位争い」、「排除闘争」を継続せざるをえなくなるからである。こうした貴族間の地位をめぐる争いは、彼らが下から迫って来る階級から脅威を受ける状況のみならず、宮廷社会という「形態」に内在する必然的圧力にもさらされるからである。それゆえ、宮廷では経済的支出はその地位にふさわしいものでなければならなかった。そうでないと地位競争に勝てなかった。金をためることは貴族の美德ではなく、地位の低い職業的市民の規範であった。彼らは、その地位の永続性と安定性のためにたびたび大盤振る舞いをして、浪費を競うような、現代人から見れば、ばかばかしい、不合理な消費生活をせざるをえなかったのである。エリ阿斯は宮廷社会における地位争いや権勢誇示のための浪費生活の必然性を、アメリカの経済学者ソースティン・ヴェブレンがその有名な著書『有閑階

級の理論』で定義した「顕著な消費」からヒントを得たようであり、たびたびこの書に言及している⁽¹⁸⁾。かくして、宮廷の権力構造はすべて同じ価値と脅威を宮廷人に植えつけることになり、宮廷内の権力闘争、地位の保全をめぐる戦いが繰り広げられた。同じことはテクノロジーが発展した現代産業社会において、たとえばグローバリゼーションの名のもとに展開される世界的な経済競争に多くの企業が巻き込まれる状況に似ている。こうした熾烈な経済競争は宮廷社会内の地位争いや排除闘争にたとえられる。企業間の競争は同一企業内の対立や協調や再編を促し、現代ではそれは国内でも国外でも起こり、相互依存の連鎖やネットワークの拡大によってまるで自動機械のように進行し、またその動きをもはやだれも止められないし、それがこれからどのような方向に向かうのか、たとえばどの企業が最終的に生き残るのかだれも予測できない。

エリ阿斯は、対立や協調を繰り返しながら、宮廷社会の中で人間集団をさまざまな形に相互依存させるこの自動機械の役割を、マナーやエチケットに見出す。『文明化の過程』において、エリ阿斯はすでにマナーやエチケットが、中世末期からルネサンス期を経て近代にいたるまで人間社会の文明化を促す力学として、あるいは圧力としてまさに自動機械的な役割をどのように果たしたかを、具体的な例を使って証明した。そこでは、上流階級の青年に行儀作法やしつけを教えるためにエラスムス書いた『少年礼儀作法論』が重要な役割を果たした。実際、エラスムスは守られるべき人間の生理的行為、食事のマナーや顔の表情や服装について、細かい規則を提示した。食事中に唾を吐いたり、服の袖で涙をかんだりしてはいけない、汚れた手で食べ物を掴んではいけないなど、上流階級の青年にふさわしい行儀作法がその本には例示されていた。しかし、エリ阿斯はここで、その本自体やエラスムス自身がヨーロッパ社会の文明化を担う原動力であった、ということを言わんとしているのではない。エラスムス書いたこの礼儀作法の本はヨーロッパ社会を文明化へと方向づける一例にしかならなかった。重要な問題は、この本がヨーロッパの多くの国々で翻訳

されたり、類書や模倣本が出回ったり、あるいはそれに触発されて数多くの礼儀作法の本が出版され、かくして上流階級や宮廷人が守るべき行儀作法が長い過程を経て西洋社会の道德的規準になったことである。また、エリート階級が定めたこの道德規範は長期に及ぶ相互依存の連鎖の拡大によって、他の階級にも浸透し、「外的束縛」と「内的束縛」を通じてまるで自動機械のようにヨーロッパ社会全体を支配するようになったのである。かくして、マナーやエチケットが権力構造に組み込まれたのである。エリ阿斯は、日常生活の習慣や儀式がいかに政治的、文化的次元に不可分な形で結びついているかを宮廷社会のマナーやエチケットに言及することで、社会学的に証明したのである。その際、エリ阿斯は、宮廷文化の拡大に伴って儀式やエチケットが発展し、多くの宮廷人が支配される日常的習慣の例を、ルイ14世の謁見式である「朝見の式」(levée)に見る。エリ阿斯はこれを現代社会の工場組織、法律上の手続き、古代社会の儀式の意味にも通じると捉える。マナーやエチケットの発展は感情規制という圧力を人間に課し、それが、合理的態度、長期に及ぶ未来への洞察力や予見能力を養い、やがて現代社会に要求される自制という強制力につながるとエリ阿斯は言う。さらにエリ阿斯は、宮廷社会の形態の中で果たすエチケットやマナーのシンボリック機能を次のように捉える。

規定されたエチケットを守ることは国王やその家来にも浸透し、それを無視することは、権力の喪失につながった。伝統の改革を行う者はだれでも個人や家族の名誉や特権の喪失を意味し、そのような重要な権力資源を危険にさらすことはタブーであった。一つの態度が次々に別の態度を生み出し、圧力と反圧力の応酬により社会的メカニズムがある程度の均衡に達した。この均衡が表明されたのは行儀作法の中だった。この社会システムをふるいにかけて、維持したりする緊張でその内部のあらゆるつながりが攻撃にさらされ、身分の低い者や同等者が競合し、彼らは手練手管を使って様子を窺いながら国王の寵愛などを利用して行儀作法を切り崩そうとした。このため宮廷のメカニズムのわずかな変化にも敏感になり、現存

の秩序に敏感になった。宮廷内の地位は不安定であり、大小の出来事が彼らの地位を変えた。このような激しい変化について行くことが宮廷人に求められ、地位が上昇している人に不遜な態度を示すことは危険であったし、またヒエラルキーの底に沈んでいく人に接近するのも同じであった。地位の高い人や権力者にどのように適切な態度を示すかが重要であった。

マナーやエチケットが人間の社会的な地位の標章となり、人間の行動様式を規定するこうした宮廷社会の構造は、現実適合的で合理的な態度という点では、その表面的な形は違えども、現代の産業社会にも通じるものがあるし、宮廷人と現代人の間には感情規制の次元で連続性もある。現代の官僚機構や会社組織や工場、あるいは教育機関では、労働の合理的遂行、利益目標や生産目標の合理的達成、時間の合理的配分のために、あらゆる人が一定の規則に従わなければならない。規則の厳格性、厳密性の度合いは、いわゆる発展途上国、もしくは原始的な社会のそれに比べればかなり高い。現代の会社や工場で働く人は、高度な自制と時間の厳密性に堪えなければならない。憎い上役に突っかかり、暴力をふるったり、あるいは決められた時間を無視すれば、その人は、昇進の機会を失うだろうし、犯罪者のための特別な収容所に入れられることもありうる。ところで、こうした高度な自制を強いられる生活は、産業以前の自給自足的な農村や漁村で暮らしている人にはちっとも楽しくないであろう、時間に縛られた規則づくめの生活はノイローゼの原因になるかもしれない。とはいえ、例外もあろうが、現代人の多くは単調な工場労働や事務作業、それに伴う高度な自己抑制（これはマルクス主義の用語では疎外ということになる）には慣れるかもしれないし、それをあえて受け入れる「第二の天性」が形成される可能性がある（事務労働者は余暇時間を利用して、スポーツやゲームの中に許された範囲で楽しい興奮を味わうかもしれないし、宮仕えを逃れられない運命として受け入れた宮廷人は空想的な芸術創造を通じて、現実と同化する性格を獲得するかもしれない）。エリアスは、自制の要求によって現代人が長期にわたって習得した合理性について、以上の例からきわ

めて重要な発言をしているし、その社会学的洞察力は注目に値する。それは、宮廷人と宮廷社会のモデルが、その発展の一形態である現代人と現代社会のモデルと相補的であるということである。

かくして、エリアスは宮廷人の合理性と職業的市民の合理性を比較し、前者を後者の前提条件と見なす。両者に共通するのは長期的な現実志向の態度で物事に配慮し、流動的な状況では瞬時の感情表現を避けることである。職業的市民階級の場合、合理的な行動規制および経済的な利害関係への配慮が第一義的であり、宮廷人の場合、社会の権力手段としての名誉の獲得と喪失の計算が最優先される。宮廷社会の水準から見た合理性や現実性は、ブルジョアジーには非現実的で非合理的ではあるが、共通点は、その時代の基準に合わせながら、自らの権力を弱めるような行動を規制すること、つまり、その時代の「形態」に準じて行動することであった、とエリアスは論じる。換言すれば、経済的利益によって権力を獲得するブルジョアジーとマナーやエチケットによって権力を獲得する宮廷人は、その合理性の手段は違うが、それぞれの人間集団が織り成すネットワークの力学は同じである。したがって、たとえば、それは特定の個人の名声欲や個人的資質には還元されず、あくまでも宮廷人が織り成す「形態」を出発点にしなければならない。そうすれば、宮廷人の行儀作法を中心とした行動様式が彼らの「第二の天性」になったことが理解されるのである。

エリアスはさらに、マナーやエチケットの発展とあいまって宮廷社会では他者観察の能力が高まることに注目する。個人はそこでは集団に所属する人間として観察され、やがて他者観察が自己観察へと変わる。宮廷社会のこうした鋭い観察力は、上流階級をよく観察するフランス文学の特質に影響を与え、それがフランス革命後も続いたとエリアスは言う。そして、エリアスはここで再びブルジョア社会の合理的精神とは異なる宮廷社会のそれに言及し、長期にわたってその文明化のネットワークがフランス社会全体に波及し、いかにフランス文化を特徴づけたかを力説する。それは『文明化の過程』第一部の冒頭の部分で取り上げられたテーマであり、「文

明化」と「文化」が貴族階級と市民階級の間で違う方向を辿ったドイツの例と比較されるとき、西洋の文明化に係るさらに重要な問題が提示される。したがって、ここで例示されるフランス宮廷社会のマナーやエチケットを中心として形成される合理的精神は、そういう意味でも重要である。フランス宮廷社会では直接的な感情を避け、自己抑制をしながら他者を扱う際に細かく配慮し、丁寧な態度が要求されるが、それは宮廷社会で廷臣たちが国王や他の権力のある貴族の間で生き抜くための重要な手段となる。フランスの古典主義や古典演劇では感情の抑制や合理的精神が要求され、それはロマン主義文学の要素とは異なる。こうした特徴をエリアスは挙げているが、ここでは、その合理的精神が少なくともナチズムやホロコーストにつながるドイツ人の非合理的精神とは異なっていたという指摘に留めておきたい。両国民の中産階級が宮廷文化をどう受け止めたかは、フランス人とドイツ人の国民的性格、エリアスの表現を借りれば「国民的ハビタス」に反映される。それは同時に、人間のあらゆる行動、芸術、趣味、道徳がフランスの場合、宮廷社会という「形態」の中で発展したのであり、それゆえ、エリアスは宮廷社会の構造を、つまりそこでの人間の相互依存関係の状況を分析することに社会学的な意義を見出したのである。

さらにマナーやエチケットが宮廷社会において、国王や廷臣を結びつけ、絶対主義という政治的空間において人間集団を支配する権力をいかにして生み出したかという問題に注目してみたい。エリアスは国王が位置している全体状況をだいたい次のように捉える。

宮廷には国王のみならず、宮廷貴族、法服貴族、武家貴族、国王の家族などさまざまな集団がネットワークを形成しており、対立や協調などの相互依存を繰り返していた。国王は多くの集団を互いに戦わせることで国王としての地位を保持できた。つまり、国王はいかにして権力のバランスを保つかを習得していた。国王はさまざまな対立集団を作り、非嫡出子など、自分の保護を必要とする集団を引き寄せ、他の集団と対立させて自分の権力を守った。これはルイ 14 世だけでなくヨーロッパの絶対王政に共通す

る「形態」であった。エチケットが生み出すその合理性のメカニズムは商品生産社会を支配するメカニズムにも似ている。かくして、名声や栄光の崇拜はフランス全土に行き渡り、ルイ 14 世からその側近のエリート集団に浸透し、やがてフランスの国民的性格にも及ぶ。しかし、国王自身も相互依存のネットワークに吸収され、身動きができない状態になる。したがって、国が大きくなればなるほど国王自身への圧力も増す。マナーやエチケットはやがて宮廷社会を維持する重要なある種の政治的手段にもなり、それは徴税や軍事の独占をも可能にする。

こうした説明に基づいてエリアスはさらにいくつか重要な社会学の方法論に接近する。まず文化、政治、産業、経済のようなカテゴリーを二分法的に解釈するのは誤りであり、宮廷社会のモデルは官僚社会のモデルとも重なりと指摘し、さらに、こうした長期的な人間社会の発展過程は、従来の「行為理論」（個人の行動が重要視される）や「システム論」（静態的な構造としての社会システムが重要視される）ではあまりよく理解できず、静態的な「システム」の代わりに動態的な「形態」の概念を導入することで、調和や均衡だけでなく対立や緊張を含むこの人間の相互依存の連鎖がうまく理解されると彼は言う。一人の国王がいなくなっても別の国王が出現すれば宮廷社会のモデルは連続性をもつがゆえに、「相互作用主義」もその出発点が一人の人間と他者の関係にある場合、それは適切な概念ではなく、「閉ざされた人間」の状況に他ならない、と彼は付言する⁽¹⁹⁾。さらに、エリアスの次のような見解は、彼自身の社会学の方法論に係る重要な問題を示唆している。

人間は生まれながらに複数の人間と係るのであり、自分の方向性や価値設定はそのような関係の中で形成され、変化する。ルイ 14 世は他者よりも「自由である」にしかすぎない。状況次第では自由でなくなることもありうる。自由の問題を哲学や形而上学のレベルで考えるべきではない。「哲学的自由」の概念は時々、現実を見誤る。一人の人間や他者が権力をもたないような権力の零度はない。そういう意味ではわれわれは絶対的に自

由でもないし、絶対的に不自由でもない。言葉を辞書的な抽象概念で使うと現実を把握できないことがある。人間は生れたときから他者との関係の中で生きるものであり、絶対的な自由の中で育つのではない。

こうした見解は、エリ阿斯が他の著書でも何度か披歴したものであるが、それは、たとえば実存主義の「自由の概念」などへの反発から生まれたものではなく、むしろこの「他人依存」の概念が自律的な社会学のモデルを構築する際に不可欠の条件になりうるという彼の確信であり、実際それは人間社会における日常生活の真実でもある。これまでエリ阿斯は、マナーやエチケットが自制を通じて宮廷人をいかに合理的精神の形成に向かわせたかという宮廷社会の心理発生に焦点を当てたが、さらに彼は社会的権力の形成としての宮廷社会の社会発生を、封建制度から資本主義への一段階として捉えようとする。つまり宮廷社会の前段階としての封建社会、その次の発展段階としての資本主義社会との有機的な関連性がここでは主な分析対象となる。換言すれば、自制による合理的精神の獲得は人間の社会関係の合理的理解へと発展するが、それはどちらが原因でも結果でもない。両者が相互に依存することで、さらに宮廷社会以外の領域にもそのネットワークが拡大し、国家形成に向けてダイナミックな社会変化を生み出す。これについてさらにエリアスの説明に注目したい。

封建制度の崩壊と宮廷社会の出現は貨幣制度の発展から見れば必然的であり、それが国王の性格を変えた。近代的な武器の使用は国王の主力部隊が、専門的な軍事集団である騎士から傭兵に移ることを意味した。つまり、身分の低い者が兵隊に変わることを意味した。封建的農業社会から宮廷社会が出現することで国王の権力は増大した。それは新しい国家の出現であり、フランスではベルサイユ宮殿がその象徴として、司法・行政・立法の統合機関となった。すでに宮廷社会では分業が始まり、それは資本主義の前段階でもあった。この頃、市民階級出身者も新しい貴族になれる相互依存関係が生じた。ブルジョア出身の貴族と旧貴族の対立も宮廷社会の重要な問題であった。貴族間、および旧貴族と市民階級貴族との戦いは国王の

地位を安定させるために必要であった。つまり、国王はどちらにも絶対的な権力を渡さないようにすることが重要であった。法服貴族の役割も重要であった。一方、大勢の下級宮廷人は貨幣経済の浸透で貧しい暮らしを余儀なくされ、中には市民階級より貧しい宮廷人がいて、そのことが彼らをしていっそう宮廷社会に依存させた。フランスの場合、ドイツと違って官僚や法律家になる宮廷人はおらず、職をもたないことがその特徴であった。ルイ 14 世の時代には女性の役割が増大したことも重要であった。国王、ブルジョア（市民階級）、貴族の関係は三つの相対立する勢力として相互に依存するネットワークを作った。そこに宮廷貴族が生きる社会的条件があり、それが貴族の生き方や文化的態度を特徴づけた。貴族とブルジョアがボクシングのクリンチにも似た対立状況を惹起し、両者はある種の均衡状態に達した。また、マナーやエチケットは国王にも圧力をもたらし、ルイ 14 世はそれを変えることで宮廷社会に脅威を作り出した。こうして宮廷社会はまるで、労働者やブルジョアを生産活動や利益追求に駆り立てる自動機械のように動き出した。改革の動きがありながら、それは現実的な勢力とはならず、非特権階級の批判の矛先が世襲貴族に向けられるようになり、徐々に状況は変化したが、旧制度内では両者の溝はあまりに深く、最終的には革命が起らないと改革できないほど旧制度は硬直化していた。しかし、打破された貴族にもブルジョア的要素が残り、勝利したブルジョアにも貴族的な要素が残った。

これがいわゆるフランス革命が起こるまでの宮廷貴族と市民階級の相互依存的な関係であり、エリアス固有の見解は、両者が対立・緊張・抗争を繰り返しながらも、それぞれの特徴を交換し、共有し合ったという部分に見られる。そこからまた彼は、これまでにすすでいくつか挙げたように、自分独自の社会学の方法論を示唆する。エリアスによれば、こうした問題に取り組むには、自然と社会を二分化したり、科学的方法に依存したりするだけでは十分ではなく、また従来の原子論的で個人中心の社会論も批判されなければならない。それに代わるべき方法は、宮廷社会のモデルで

示されたような相互依存の概念とモデルであり、換言すれば、普遍的な理論としての形態的研究である。そうすることで、社会学者は、自分が生きている時代の価値観や基準に合わせて他の社会を判断するような他律的な評価を避けることができ、他の社会でもまた、個人と他者が繰り広げる相互依存の実態を理解できるようになるのである。かくして、自律的な評価が相互依存の図式を明確に示し、普遍的な理論構築の手掛かりとなる。したがって、敗者は前体制の批判者として次の時代の勝者、代表者にもなりうるので、人間を両方に区別することは危険なのである（レイ 14 世に遠ざけられたサン・シモンの例）。

（4） 宮廷社会における文学や芸術の意味

フランス宮廷社会の構造や機能、その歴史的変遷過程と発展過程、およびそれに伴う宮廷人の相互依存関係の変化を説明する手段として、マナーやエチケットが大きな役割を果たしてきたことにこれまで焦点が当てられたが、宮廷社会で創造される文学や芸術もその点では同じレベルで論じられている。エリアスは「廷臣化の過程における貴族的ロマン主義の社会発生」という比較的長い章でその全容を説明しており、これもエリアス独自の社会学理論の不可欠な要素を示すものであろう。エリアスはここで文学作品や芸術が社会総体を映し出す鏡として、つまり反映論的な立場からそれを論じているのではないし、またマルクス主義的な上部構造の一環としてそれを捉えているのでもない。フランクフルト学派に属するアドルノやベンヤミンもマルクス主義の立場から、資本主義時代の芸術が抱える問題性をそれぞれ独自の「文化産業」や「複製芸術論」の概念から議論しているが、エリアスの立場は、現実の社会構造に対するイデオロギーを優先させるものではなく、芸術や文学の表現手段が、変化し、拡大する人間の相互依存の連鎖の一つに組み込まれ、それと常に不可分な位置を占めるというものであり、特定の文学運動に価値を求めることとは無縁である。し

たがって、モダニズムがリアリズムより優れているとか、ポストモダニズムやポストコロニアリズムが斬新で、先鋭化された文学運動だというふうな議論は見られない。あらゆる社会や時代の文学・芸術の表現形式は人間の相互依存の形態と呼応する。かくして、貴族的ロマン主義文学は、封建社会から宮廷社会に移行するときに形成される人間社会のネットワークの度合いに関連する。国王によるマナーやエチケットの基準化がもたらす心理的抑圧、自己抑制の必然性、およびそれが原因で発生する恐怖感・嫌悪感・退屈感、あるいはそれから逃れたいという夢や願望や幻想などが文学的表現の中で複雑に入り雑じるのである。

エリ阿斯はここでロマン主義を宮廷ロマン主義と後期ブルジョアロマン主義に分け、それぞれの特徴を概ね次のように説明し、その社会発生に言及する。

17世紀になると貴族はますます堅苦しい宮廷人の生活を要求される。彼らが憧れる田舎の生活は架空の、かつ理想化された羊飼いの生活、田舎の牧人の文学へと昇華される。こうして、宮廷ロマン主義は国家統合と都会化の中で中心的要素となる。これは後期ブルジョアロマン主義とは少し異なる特徴をもつ。後期ブルジョアロマン主義では、「ロマン主義的騎士」が重要なテーマとなり、それは国家の拡大、宮廷社会の飛躍的發展、人間生活の機能分化と並行し、その際「戦士の廷臣化」という社会学的過程が生じる。それは産業化と商業化、およびそれに伴う相互依存の連鎖の広がりという状況に直面する。宮廷ロマン主義も後期ブルジョアロマン主義と同じく、個人が自制を失い、衝動に身を任せることは自らの敗北を意味する。後期ブルジョアロマン主義では芸術のエリートは美しい過去への憧憬、失われた過去の夢の回復を、その歴史感覚と一体化させる。しかし、宮廷ロマン主義はそうした歴史感覚、歴史意識を欠いており、その幻想的な夢は、実現されない現実からの解放感を、単純な人間像に求めることで満たされ

る。彼らには後期ブルジョアロマン主義者のようにその理想を騎士や巨匠的職人に投影する歴史感覚はなく、したがって、単純素朴な羊飼いの劇を、異なった服装で演じることに貴族の理想が向けられることになる⁽²⁰⁾。

エリアスはさらに二種類のロマン主義の共通性を、ロマン主義の社会発生という観点から次のように分析する。

両者には歴史的な違いがあるが、相互依存の拡大に伴う感情的不満の徴候が共通点である。しかし、感情や情緒を直接表現することは危険であった。ロマン主義的感情は自分が逃避する現実の否定的価値を全面に押し出す。自分たちが憧れており、投影したいものには、自分たちの望むすべてが、つまり、自分たちの社会の中で望まれないものの反対物が全面に拡大される。その反面、自分たちが歓迎したくないものが背景にかすんでしまう。アンシャン・レジームの宮廷社会における現実的な田園のイメージは、現代の圧力や欠陥の反対物としての機能、失われた過去の機能を果たす。単純素朴な田園生活は、かつてはあったが今はなくなってしまった自由や自発性への願望のイメージと結びつく。田園生活や田舎社会の理想化、戦士や羊飼いや農夫などの紋切り型の登場人物には都会化による「疎外」が反映されるが、それはまた「戦士の廷臣化」によって概念化され、その背後には、社会がさらに大きな単位に統合されるという事実がある。二つのロマン主義は非連続ではあるが、宮廷貴族の自然生活のロマン化と都市ブルジョアの自然のロマン化には接点がある⁽²¹⁾。

かくして、エリアスはこうした宮廷ロマン主義特有の感情の構造を二人の有名な七星派の詩人デュ・ベレ (du Bellay) とロンサル (Ronsard) の詩の中に探求する。彼らの詩をいくつか引用しながらエリアスは、田園

生活の喪失の嘆きと、その回復の願望という共通の詩的感性をそこに指摘し、アンシャン・レジーム下の宮廷生活（特にアンリ4世からルイ14世の時代まで続く宮廷生活）においていかに人生が画一化され、規制され、自由を失っているかをわれわれは予感できると言う。そこには自由のない宮廷生活という支配的雰囲気徐徐に拡大し、宮廷生活へのアンビバレントな感情が漂っているのである。宮廷ロマン主義の発生についてさらにエリアスの視点から見てみよう。

多くの連続的な社会発展と変化がある点に達し、多くの変動を伴いながらも中心的支配者の社会的地位を生み出す方向に向かい、それと同時に宮廷エリートやブルジョアが形成される。多数の宮廷人、その人間関係や利害関係を決定的に支配する中心的人物（太陽王ルイ14世）が登場し、それとの相対関係で全体の機構が動き始める。宮廷人はルイ14世の時代にはあらゆる次元でもはや自由ではなくなり、宮廷生活の大きな圧力にさらされる。それに従わなければ彼らの権威や地位は失墜してしまう。今や宮廷生活は歴史的必然のようになる。宮廷人がそれぞれ行使する相互の圧力は、それが避けがたいものであれば、いっそうロマン主義的感情を喚起する。その高度な自己抑制こそ、逆に現実では果たしえない自然生活の夢を彼らの心に呼び覚ます。宮廷では決闘のようなあらゆる個人的暴力は禁じられ、自制が強制され、激しい怒りや敵意を表わすことはできなくなる。宮廷人にとってあらゆる社会行動は意識的に習得されて、「欺瞞」という性格をもつ。宮廷貴族は、それが「第二の天性」になっているのを意識していなくても、自分が欺瞞者であり、仮面を付けていることを知っている。自己抑制への増大する強制は、彼らに新しい楽しみ、洗練さ、価値を、また新たな芸術への要求という新しい危険を生み出す⁽²²⁾。

ここで言及されている「新しい危険」というのはおそらく単調で抑圧さ

れた生活を活性化してくれる、あるいは許された範囲で興奮を追求できるある種の刺激物のようなものと解される。あるいは、それは俗に言うスリルかもしれない。エリアスはこうした新たな要求物である楽しみを宮廷人にある種の娯楽小説に見出したと言う。エリアスによると、17世紀にフランスでは、今ではそれほど楽しいとは思われていないが、多くの娯楽小説が書かれ、これが過去の出来事を明快にわれわれに教えてくれる。いわゆる文学作品ではなくとも、そうした娯楽小説は当時の人間の行動様式、習慣、行儀作法の描写やその記録として読めば面白いものであり、その代表がデュルフェ (d'Urfé) の『アストレ』(L'Astrée) である、とエリアスは言う。エリアスはそのプロットと解釈について概ね次のように語る。

この小説は権力が君主やその代表者に移った頃のフランスの世相を描いている。作者は国王に反対して獄舎につながれたが、その後この本を国王に献納した。彼は宮廷人ではないが、教養人であった。ここでは政治的敗北が芸術的勝利として表明され、二つの相対立する要素、肯定と否定が交錯する。敗北者に、体制側につくか、部外者になるかを迫るような時期に書かれたことを示す特徴がこの小説にはある。登場人物が素朴な羊飼いに変装することで、一方では、現実の不可避的な社会変化を受け入れながら、他方では、過去の単純な、失われた思い出に耽る。ここにフランス宮廷ロマン主義文学の特徴が体現されている。その代表者がデュルフェである。羊飼いに変装することで若者は間接的に上流貴族の価値観を否定する。宮廷社会の「疎外された生活」、「自然を失った生活」の描写に、敗北した階級の芸術的意識が反映されている。宮廷社会における社会構造の全体的変化、それに伴う新たな人格構造の出現に対して、無駄だと知りつつも反抗を試みるロマン主義的感情がそこには見られる。『アストレ』の主人公たちは、自己距離化ができていく段階の人々によって書かれた貴族の芸術である。彼らは自分たちの世界が変わったことを自覚している。一見、純

粹な恋愛小説のように見える『アストレ』も実は、新しい国家の形成、古い戦士貴族から宮廷貴族への変化、和平化、戦いの空しさという歴史認識を伝えている。それは国家権力や宮廷貴族の社会と戦うことは不可能であるというイデオロギーを、また、自製の内面化の必然性を、つまり文明化を示唆している⁽²³⁾。

これは、エリアス独自の実に興味深い宮廷ロマン主義小説の分析と解釈である。現代人にとって文学作品としてとりわけ面白いとは言えないこの恋愛小説に、エリアスは、古い戦士貴族の社会から宮廷社会への変化を促すさまざまな社会的条件を、心理的条件と同一レベルで捉え、社会構造の変化を人格構造の変化と相互依存的に論じているのである。が、『アストレ』の文学的配置は、そうした狭い空間でのみ解釈されるべきものではなく、次の時代の人格構造とそれにふさわしい文学的感性の前触れであり、文学的次元での連続性、継続性をもつ。エリアスはさらにこの小説のそうした特徴に注目する。

さらに、『アストレ』における恋愛関係はブルジョア文学の愛の理想にもなる。二人の愛が両親もそれを引き離せないほど絶対に強いことが描かれているが、それが後期ブルジョア恋愛小説の萌芽となる。愛の試練、長い愛の闘争はやがて、長期的な愛情生活へと発展する。また、『アストレ』のブルジョア的中産階級は貴族による上からの圧力と、低い階級による下からの圧力も同時に受けている。現代社会では、特に文化面においてブルジョア的中産階級は、上からも下からも圧力を加えられ、両者の板挟みになる。つまり、そこには近代における中産階級の文化的不安が示唆されている。二つの勢力に挟まれる中産階級は文明化の圧力と悩みを象徴している。権力者が非権力者から圧力を加えられるその権力配分は一様ではない。一方の階級が他方の階級を絶対に支配したり、圧力をかけたりしているわけではない。

『アストレ』における分析は、階級的には単純化されているが、この権力配分は現代社会では都市ブルジョアや農民を加えるとかなり複雑である⁽²⁴⁾。

エリアスの解釈によると、一見、単純に見える『アストレ』の階級構造も単に古い貴族と宮廷人との対立、和合という二元的世界で捉えられるものではなく、宮廷社会の背後から迫り来る市民社会の勢力、さらにその周辺にいる農民階級を加えると三重、四重の相互依存に発展し、その複雑さを増すことになる。またそれは、近代社会において中産階級がさらされる文化的二面攻撃という共通性を示唆する。こうした観点から見ると、文学における特定の運動や主義も個別に切り離されるものではなく、たとえばロマン主義——リアリズム——モダニズムという文学的潮流も直線的な変化としてではなく、相互依存的な関係として解釈する必要がある。社会構造の変化は人格構造の変化に呼応し、かつ文学的感性の変化とも交差することになる。そこには勝者と敗者、善と悪の二者択一の論理はない。

(5) 結語：宮廷社会のモデルとその応用

どのような王朝も政体も絶対的な支配体制を永続化することはできない。組織に内在する緊張・対立の力学を効果的に支配していた中心人物とそれを支えるエリート集団は独占していたその権力資源を、対立する他の集団に譲り渡すことになる。長期的な相互依存関係の中で権力の配分が一方から他方に大きく傾く。こうした権力の推移は同じ階級や階層の対立集団同士で起こることもあるが、たいてい権力を独占していた「定着者」集団と「部外者」集団の間で起こる⁽²⁵⁾。両集団が妥協し、歩み寄って権力資源を平等に分配することもあるが、旧特権集団が自らの存在や価値観が全面的に否定されることを恐れて、妥協を拒否し、暴力の応酬によって問題が解決の方向に向かうこともある。「部外者」集団が勝てば、それは革命と呼

ばれ、実際、フランス宮廷社会とそれを支えたブルボン王朝は、自由・平等・博愛の下に結集したフランス市民によってその宮廷的機能を停止させられた。なぜこのような革命が起こったのか、その理由や原因についてはこれまで多くの歴史家・経済学者・政治学者が議論し、多くの書物が書かれてきたので、それをここで取り上げてもさほど大きな意味はない。エリアスの場合、そうした因果関係に基づく説明は、一見、合理的で正しいように見えても、社会学的な診断や検証という点からすれば不十分であり、イデオロギー的な先入観に冒されやすいということになる。

したがって、『宮廷社会』の最終章は「フランス革命の社会発生について」と題されているが、エリアス自身の社会学的な見解以外には、革命について従来の社会学者が施すような詳しい説明はない。エリアスが提示するフランス革命の社会学的診断は概ね次のようなものである。

こうした急激な暴力革命に対処するには旧権力集団は、社会的権力を増大させている集団に、絶対的な権力ではなく、自分たちのパートナーとして重要な政治決定に参加させるようなシステムを調整することが重要である。また上昇して来る集団に政治的独占権ではなく、経済的な権益を分与することでその集団を従属的な立場に保つことが重要である。支配階級は、自分たちの社会条件や権力関係が永続的ではないことを自覚し、新しい階級に権力が移ることを認識しなければならない。ところがこうした方法や態度はいずれも旧権力集団によって無視された。

それゆえ、「定着者」集団と「部外者」集団の戦いの結果をエリアスは概ね次のように捉える。

発展する新階級にはそれにふさわしい社会的、政治的、経済的条件を提示することが重要である。ところがフランスの貴族にはこうした対応能力が欠けていた。「部外者」の権力を認める「定着者」の判断が政治的対立や政治革命を防止する鍵になる。暴力革命を防止する洞察力はフランス貴族にはなくなり、古い制度、古い権力配分、固体化されたクリンチのような勢力関係はフランス革命を、宮廷社会の機能不全を用意した。

かくして、ルイ 16 世は断頭台の露と消えたのである。周知のごとく、イングランドのピューリタンを中心とする市民階級もチャールズ 1 世をフランス革命に先立って処刑したわけであるが、その後、イギリスの市民は、とりわけ政治的な次元で議会政治を通じて妥協の精神を発揮し、暴力革命を避ける方向に向かったのである。こうしたイギリスの国家形成の過程とそれによる人格構造の形成はイギリスの文明化において、フランスやドイツの文明化との関係で重要な役割を果たしたことにエリ阿斯はたびたび言及し、それをモデルとして重要な社会学的理論を構築した。フランスについても、革命で宮廷社会の伝統が断たれたとはいえ、そのエトスが相互依存関係を通じてフランス市民に継承され、同じくフランスの国民性、フランス人の人格構造に影響を及ぼしているとエリ阿斯は論じているが、王朝の伝統が断たれたことが良かったのか、悪かったのかという価値判断は避けているし、また社会学者としてそのような問いに答える必要もない。

ともかく、ルイ 14 世を絶頂期として長年続いたフランスのこの王朝政治は、エリ阿斯が『宮廷社会』の冒頭でも述べているように、その長きにわたる安定性——エリ阿斯の言う「和平化」——という点で長期的な過程分析を可能にさせる格好のモデルとなった。とはいえ、前にも触れたように、安定性とか「和平化」という言葉はその背後に対立や緊張などの含みがあって初めて意味をもつ。秩序と無秩序の関係も同じである。永遠に平和な時代や、永遠に秩序のある社会が存在するわけではない。ルイ 14 世は確かに領土拡張戦争や王位継承戦争でたびたび勝利し、フランス社会を安定の方向に導き、宮廷では暴力ではなく、形式上マナーやエチケットが支配する機構の中心的存在として君臨した。しかし、一方では、彼は長い暴力の連鎖にも直面していた。フランスのプロテスタントはアンリ 4 世が 1598 年に発布した「ナントの勅令」によって信仰の自由を得たが、ルイ 14 世はそれを 1685 年に撤回し、プロテスタントの一派であるユグノー派に弾圧を加えた。エリ阿斯は初期論文「ユグノー派のフランスからの追放」でその状況を詳しく解説している。少数派であるが経済的権力をもつ

ていたユグノー派は、フランスに貧困が蔓延し、また宮廷がカトリックに支配されていることもあって、国内に貧困をもたらす悪の根源として、ルイ14世から悪魔化され、スケープゴートにされたとエリアスは言う。その結果、彼らの礼拝堂は破壊され、彼らは公職から追放され、結婚・職業・出版の自由を奪われた。弾圧は過酷を極め、ルイ14世は戦争から帰った竜騎兵を使ってユグノー派を追放しようとした。竜騎兵は放火、強姦、拷問など悪の限りを尽くした。やがて残虐行為に耐えかねたユグノー派はイングランドやスイスに逃亡し、フランスの経済は停滞した⁽²⁶⁾。

こうした点からも、あらゆる社会の支配者集団が、「定着者」として自らの安定性を保つために、外部に「部外者」的な集団を置かざるをえなくなるという社会学的状況を、エリアスは早い時期に感じ取っていたように思われる。したがって、宮廷社会の場合、宮廷内部の派閥抗争のみならず、その外に位置する職業的市民階級やカトリック以外の宗教団体などとの複雑なネットワークの中で機能していたと言えよう。マナーやエチケットは日常生活の儀式的な規則であるが、こうした緊張関係の中で疑似的な安定性を生み出す政治的手段であったとも言えよう。かくして、マナーやエチケットを武器に危機感や恐怖や脅威を煽りたて、複雑な相互依存のゲームを戦わせる中心人物——ある時はカリスマ的人物——が必要とされ、その役をルイ14世が担ったことになる。歴史家の立場からすれば、その偉業はルイ14世の個人的な才能や資質の所産ということになるが、エリアスから見れば、それは他の国王でも状況次第ではできることであり、人間集団の相互依存関係においてのみ意味がある。

これと同じような見解は、『宮廷社会』の補遺(1)の国家社会主義に関するエリアスの社会学的分析にも見られる。端的に言えば、宮廷社会のモデルは、宮廷社会の分析にのみに当てはまるものではなく、ナチスの権力構造の力学を分析する際にも応用可能であり、そこには類似性があるというのがエリアスの見方である。エリアスはここでもヒトラーの独裁政治をヒトラーの個人的資質に還元しないよう警告する。さらに、こうした権力

構造は長い歴史的過程の中で形成された、上からの支配を望むドイツ国民の人格構造によって活性化されたことをエリアスは強調する。つまり、エリアスは、ナチスの独裁を異常なもの、常軌を逸したものとして捉える歴史学的解釈を社会学的視野の欠落した認識と見なす。そこから彼は、経済的地位や名誉をめぐるエリート集団が対立する構造は政治的統合を目指すあらゆる独占的政府の正常な現象であり、それは産業国家でも宮廷社会でも、独占的支配を求めるあらゆる集団的エリートが示す構造的特徴だという結論に達する。

こうしたエリアスの見解からわれわれは、文明化の過程の理論と並んで宮廷社会のモデルが、社会学研究においてかなり応用範囲の広いものであり、これまであまり注目されなかった歴史的事象を、研究の対象に値するもの、あるいは発展の可能性があるものとして再定位する際に有益であることを理解できよう。エリアスの文明化の過程の理論は元来、中世末期から近代にかけて起こった、西ヨーロッパの歴史的変化に伴う人間の行動様式の変化に焦点を当てたものであったし、宮廷社会のモデルもその範囲内で構築されたものである。それを社会学の理論としてどの程度、非西洋圏の社会、つまり日本や中国などの東洋社会の構造的変化に応用できるかは現段階ではまだ実験的なものにならざるをえない。しかし、ヨーロッパよりも長い王朝の歴史が続いた中国、あるいはヨーロッパとは違って戦士社会の前に宮廷社会が存在した日本などは、人間の社会発展が生物学的進化とは違って直線的ではないというエリアスの考え方を示す良い例であり、同時にますます相互依存関係を深める今日のグローバルな社会を分析する上で重要な社会学の研究対象になりうる。その点では、宮廷社会のモデルを応用しながらアメリカ南部の大農園の社会構造や農園主の人格構造を、アメリカ北部市民階級のそれと比較しているS・メネルの著書『アメリカの文明化の過程』はきわめて啓発的である⁽²⁷⁾。

最後に補遺(2)でエリアスは宮廷社会における貴族の執事の役割に注目し、当時の貴族は、産業経営者のように収入や資本を増やすことは許さ

れず、したがって、執事も、会計の際に赤字になってもよいことを知る必要があったことに触れている。ここで理解されるべきことは宮廷貴族の経済観念は産業ブルジョアジーのそれとはまったく違っており、「経済」という言葉も意味が違っていたことである。ここではなぜ、あるいはどのように人間の経済活動における価値観が変わるのかという問題が尋ねられるべきである。軍事戦士社会では武力が経済を決定するが、産業社会では武力の価値は低く、そこでは赤字や借金は批判される。エリアスはここでも歴史的变化に伴って経済観念が変化し、ある経済規範が機能不全に陥る理由を知るには、社会的「形態」（相互依存関係）の変化という視点が必要であると主張する。赤字を許される執事の役割は宮廷社会ではだれでも分かるが、現代人にはあまり分からない。宮廷社会では重農主義が経済思想の中心であり、農業がもたらす自然の恵みが富の源泉であったことを現代の投資家に納得させるのは楽ではない。また同様に国家が赤字財政に悩み、現代の多くの人々の生活がグローバル化した金融システムに左右されていることを中世の農民や宮廷人に分からせることも難しい。しかし、「諸個人の住む諸社会」が独自の相互依存のネットワークを有し、その輪のある時は急速にまたある時は緩やかに、しかも連続的、継続的あるいは断続的に拡大する長期的な過程を念頭に置けば、変化する人間社会の諸相を理解することが少し容易になるかもしれない。そのような社会学的作業に取り組む際にエリアスが提示する宮廷社会のモデルは今もなお有益である。

注

- (1) ただしドイツ語版『文明化の過程』の第二版は『宮廷社会』の初版と同じく1969年に出た。ちなみに日本語訳の出版は、前者の上巻と下巻が1977年、1978年、後者が1981年である。なお、本稿では次のテキストを使用した。Norbert Elias, *The Civilizing Process* (Oxford: Blackwell, 2000); *Über den Prozeß der Zivilisation* (Frankfurt a.m., Suhrkamp, 1997), Norbert Elias, *The Court Society* (Oxford: Blackwell, 1983); *Die höfische Gesellschaft* (Frankfurt a.m., Suhrkamp, 1999)。

- (2) Robert van Krieken, *Norbert Elias* (London: Routledge, 1998), p. 85.
- (3) 「外的束縛」(Fremdzwänge/external constraints)と「内的束縛」(Selbstzwänge/self-constraints)の定義については次の文献を参照。Norbert Elias, *The Germans* (California Univ. Press, 1996), pp. 32-33. J. Goudsblom, E. Jones and S. Mennell, *The Course of Human History* (New York: N. E. Sharpe, 1996), p. 111.
- (4) 「戦士の廷臣化」(die Verhofung der Krieger/the courtization of the warriors)の概念については次の文献を参照。Die höfische Gesellschaft, S. 66, S. 98. J. Goudsblom and S. Mennell, eds., *The Norbert Elias Reader* (Oxford: Blackwell, 1998), p. 66, p. 98.
- (5) 「ハビタス」(Habitus/habitus)の定義については次の文献を参照。なお、エリアスはこの言葉を、フランスの社会学者ピエール・ブルデューよりも先に使っている。The Civilizing Process, x-xi; J. Goudsblom and S. Mennell, eds., *Norbert Elias: On Civilization, Power and Knowledge* (University of Chicago Press, 1998), p. 10.
- (6) *The Course of Human History*, p. 30 を参照。
- (7) 「形態／図柄／関係構造」はドイツ語 Figur/Figuration および英語 figuration の訳語。この定義については以下の文献を参照。The Norbert Elias Reader, pp. 130-31.
- (8) *The Norbert Elias Reader*, p. 16.
- (9) *The Court Society*, pp. 26-27. (要約)
- (10) *The Court Society*, pp. 28-29. (要約)
- (11) *The Court Society*, pp. 30-31. (要約)
- (12) *The Court Society*, pp. 32-34. (要約)
- (13) 「参加」(Engagement/involvement)と「距離化」(Distanzierung/detachment)の概念については以下の文献を参照。The Norbert Elias Reader, pp. 84-91.
- (14) *The Norbert Elias Reader*, p. 15.
- (15) *The Norbert Elias Reader*, p. 15.
- (16) *The Norbert Elias Reader*, pp. 16-17.
- (17) *The Court Society*, p. 40.
- (18) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class* (New York: Prometheus Books, 1998), pp. 68-101 を参照。

- (19) 「閉ざされた人間」(homo clausus) の定義については, *Norbert Elias: On Civilization, Power and Knowledge*, pp.3-4 を参照. その反対の概念としてエリ阿斯は「開かれた人間」(hominess aperti) を使う.
- (20) *The Court Society*, pp. 215-217. (要約)
- (21) *The Court Society*, pp. 224-225. (要約)
- (22) *The Court Society*, pp. 239-241. (要約)
- (23) *The Court Society*, pp. 250-256. (要約)
- (24) *The Court Society*, pp. 257-266. (要約)
- (25) 「定着者」(the established) と「部外者」(the outsiders) の概念については以下の文献を参照. Norbert Elias, *The Established and the Outsiders* (London: Sage, 1994). 日本語訳は『定着者と部外者』(大平章訳, 法政大学出版社, 2009).
- (26) *The Norbert Elias Reader*, pp. 18-25 を参照.
- (27) Stephen Mennell, *The American Civilizing Process* (Cambridge: Polity Press, 2007), pp. 81-105 を参照.